

瀬古利彦 さん

陸上競技指導者



せこ・としひこ

1956年、三重県桑名市出身。高校時代から陸上中距離選手として注目され、早稲田大学進学後はトラック競技、駅伝、マラソンで活躍。モスクワ五輪(日本不参加)、ロサンゼルス五輪、ソウル五輪のマラソン選手に選出された。現役引退後は指導者に。現在、横浜DeNAランニングクラブエグゼクティブアドバイザー、日本陸連強化委員会マラソン強化戦略プロジェクトリーダー。

マラソン人生の原点は アニメ『巨人の星』

「本来なら、今頃はユタとコラドを回って、選手の仕上がりが状況を確認していたはずだったんですが」

取材が行われた6月中旬、残念そうな表情を見せた瀬古利彦さん。3度のオリンピックでマラソン代表選手として選出され、現在、日本陸上競技連盟のマラソン強化戦略プロジェクトリーダーの要職に就くレジエンドの走りの原点は、ふるさとの三重県桑名市にあったといいます。「実家は桑名の市街地から離れた友村という小さな集落で、水道管の鋳物のバルブを削る工場を営んでいました。母も工場

「足の速い運動会のスターが 甲子園を目指して毎日走っていた」

働いていたので、私はいつも外で遊び回っていました。周囲の田んぼ、畑、小さな山が遊び場。とくに家の前の川ではよく遊びましたね。魚釣りに川遊び、鬼ごっこに河原ダッシュ。河原の砂の上を走ると、キック力やバネが鍛えられるんですよ。おかげで小さい頃から断トツで足が速くて、運動会ではスター。運動会が近づくと、河原に子どもたちを集めて、リレーの練習をしていました」

当時は野球選手になるのが夢だったという瀬古さん。

「アニメの『巨人の星』に憧れて、高校野球で甲子園に出場したいと思っていました。主人公の父が『甲子園に行きたいなら走れ!』といていたのに感

化されて、小学校4、5年生頃から家と学校の往復3kmの道を走るようになりました。走るのはおもしろいことじゃなかったけれど、甲子園に行くためだと思っただけで走っていましたね」

走り込みの成果がはつきり現れたのは、中学1年生のとき。

「学校が開催した6kmのマラソン大会で、3年生を差し置いて1年生の私がぶっちぎりで勝ったんです。すると、陸上部の顧問から『足を貸してくれ』と声がかかった。その日だけでいいからといわれて、市の大会に出場したら優勝。その流れで県大会に進んだら、当時の三重県記録で優勝したんです。このとき初めて、俺って本当に足が速いんだなと実感しました」



「選手時代は1日も休みはなかった。その後指導者になり、監督引退後は、その分の親孝行をしようとちよくちよく故郷に戻っています。母は一昨年、94歳で亡くなり、今は、同級生と飲んでいます」

幼い頃の東京五輪の 思い出がマラソンだった

それでも夢はあくまで甲子園。「私がいつちやいけないけど、当時は、運動部の花形は球技。運動のあまり得意ではない人が入部するのが陸上部だと思っていましたからね（笑）」

中学3年生のときに肩を痛め、野球で県大会に出場できなかつたのを機に陸上に転向。陸上強豪校・四日市工業高校に進学し、インターハイ、国体、高校駅伝などで頭角を現しました。その後、早稲田大学に進学。憧れの名門競走部に入部し、名伯楽・中村清監督の指導のもとマラソン選手として開花しました。「選手時代は、益も正月もなくひたすら練習で、家族に会えるのは試合の前夜だけ。両親が桑名から応援のために出てきて、

「つらくてたまらないときに

救ってくれたのはおふくろでした」



私の6畳一間の下宿に泊まっていくんです。おふくろの味といえば、土産にもってきてくれる炊いた黒豆と、家の前の川で獲った川魚の田作り。甘くておいしかった。練習は毎日とんでもなく厳しかったから、つらくてもうやっつけられないと思ったときに、食べていましたっけ」

24歳で選出されたモスクワ五輪はボイコット。金メダル候補と騒がれたロサンゼルス五輪では、プレッシャーに耐えかねて、泣きながら母親に電話をかけたことがあったといいます。

「おふくろは私に『死んだらあかん』といった。こんな思いをさせてしまったおふくろには、ちゃんと孝行しなければいけないと、監督引退後はちよくちよく実家に帰るようになりました」
瀬古さんとオリンピックの出会いは、小学校2年生。

「東京五輪の翌年、市内の映画館で記録映画を観て、一番印象に残ったのが、アベベと円谷幸吉が競ったマラソン競技でした。当時は、私がマラソン選手になるなんて想像もなかったけど、不思議なものですね」